

2024年9月29日 聖霊降臨節 第20主日礼拝メッセージ

「人生を問うのではなく、人生から問われている」

牛田匡牧師

聖書 コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章 1-10節

石川県能登地方で大雨特別警報が発令された豪雨から、昨日で一週間が過ぎました。すでにテレビのニュースでもたくさん報じられていますが、今年の元日に大震災があり、そこから9ヵ月を経て、少しずつ、少しずつ復興、生活の再建がなされて来ていた所でした。そこに、再び豪雨による洪水と土砂災害が起こりました。いまだ行方不明の方々の搜索は続けられているようですが、すでに12名の方の死亡が確認されたとのことでした。

今もまた日本近郊に、二つの台風が発生していますが、台風が来るたびに、あちこちで大災害となっています。地球温暖化の影響で、台風の勢力も強まり、過去に例がないような雨風となっています。「どうしてこんなことが起こるのか……」その問いに対して、海の水温がどうだとか、高気圧と低気圧の配置がどうだとか、科学的な説明は出来るかもしれませんが、そのような説明を聞いたところで、被害を受けた人々は、到底納得することは出来ないでしょう。

それまで考えもしなかったような不幸に見舞われた時、人は「どうしてこんなことが……」と考えてしまいます。そして、ある人は「過去に自分が悪いことをした罰が当たったのか」と考えるかもしれませんが、また「自分ではなく、先祖の誰かが罪を犯したから、その報いであつたり、祟りを受けたりしている」と考えるかもしれません。そのような因果応報の考え方は、日本だけに限らず、聖書の中にも記されている通り、古今東西、世界のあちこちで考えられてきた人間の素朴な思考パターンなのでしょう(参照、ヨブ記、ヨハネ9章)。

良いことをした人には、良いことが起こり、悪いことをした人には、悪いことが起こる……。人と人との関係性で言えば、良いことをされたら良いことをお返ししたいと思えますし、悪いことをされたら悪いことをお返ししたいと思う。そんな気持ちになるのが当然かと思えます(マタイ5章)。しかし、大雨や地震、干ばつなどの自然災害は、そうではありません。善い人なのに不幸が続いたりすることも、往々にしてあるのではないのでしょうか。そのような現実を、私たちはどのように受け止めることが出来るのでしょうか。

今回の聖書の言葉の中では、10 節で「私たちは皆、キリストの裁きの座に出てすべてが明らかにされ、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行った仕業に応じて、報いを受けなければならないからです」とパウロによって述べられていました。つまり、最後の審判の日に「地上の肉体を持っていた時の行いによって、神様によって裁かれますよ」というわけです。このような「死後の裁き」のイメージは、福音書の中にもいくつか見られますが(マタイ 25 章、ルカ 16 章)、これも古代ユダヤ教だけに限らず、日本でも、その他の国々でも古くからある考え方なのだろうと思います。「死後に地獄に行かないように、生きている間も悪いことはしないようにしましょう」と脅すというのが、その目的でしょうか。もちろん、そのような抑止効果もあると思いますが、ここでパウロによって語られているのは、脅しというよりは、むしろ励ましだったようです。

9 節には「体を住みかとしていようと、体を離れていようと、ひたすら主に喜ばれる者でありたい」とあります。大切なのは、私たちのこの地上を生きている肉の体を持っていても、持っていなくても、どちらであれ「主に喜ばれる者でありたい」ということです。その前の 8 節までで述べられているのは、私たちのこの肉の体である「地上の幕屋(テント)」は、時間的にも限りがある仮の宿である一方、神様から与えられる「天の住まい」は永遠で、体を包み込む上着であり、死を呑み込む命だということです。

そうであるならば、「老いも病も、痛みも苦しみもあるこの地上の生を早く終わりにして、永遠の命に包まれた天の国に早く行きたい」と考える人が出て来てもおかしくありません。事実、そのように考え、この地上での生活は、無価値であり、無意味であると考えた人もいました。しかし、パウロはそのような人たちへの反論として、「体を住みかとしていようと、体を離れていようと、ひたすら主に喜ばれる者でありたい」(9)と語りました。それは言い換えるならば、肉の体、地上の命も決して無価値ではない、確かに生きる意味があるということです。

4 節には「この幕屋に住む私たちは重荷を負って呻いています」と記されています。2 節と 4 節にある「呻く」という言葉は、「ため息をつく」という意味です。確かに現実の生活の中では、ため息をつき、呻き声をあげるような重荷、しんどいことがあります。けれども、だからと言ってこの地上での命を放棄はしない……。イエス様が「祈る時には、こう祈りなさい」と教えたと言われている「主の祈り」でも、「死

んで天国に行けますように」とは祈らずに、「この地上に御国が来ますように。この地上を天国のようにさせてください」と祈ります。またパウロ自身も別の箇所、「(キリストの)力は弱さの中で完全に現れる」(コリントⅡ 12:9)と記している通り、有限で、弱く、不完全に過ぎないこの地上の命の中にも、確かに神の力が豊かに働き、私たちを支え、生かしてくれています。有限だから無意味なのではなく、永遠があるからこそ、今、ここに、力が与えられるのです。

今回のメッセージの題「人生を問うのではなく、人生から問われている」というのは、ヴィクトール・フランクル(Viktor Emil Frankl, 1905-1997)の言葉です。彼は第二次世界大戦中のナチス・ドイツによるユダヤ人大虐殺を生き延びた精神科医です。ユダヤ人であるというだけで、仕事も、住まいも追われ、強制収容所に送られ、そこでは家族も持ち物も全て奪われた上に、名前まで奪われて全ての人はただの番号となったそうです。そして過酷な重労働と、監守による暴行、劣悪な生活環境と栄養失調などで、毎日何人もの人々が亡くなり、また殺されていったそうです。生きる希望が見出せず、絶望しかないような日々の中で、自ら命を絶った方々も多かったそうですし、衰弱して病気になり命を落とした人も、ガス室で殺されて行った人々も数多くいました。そのように生きる意味が見出せない極限状態の中にあっても、それでもなおフランクルが自らに課したのは、「この現実にも何か意味があるはずだ」というものでした。

彼は、精神科医として、「全ての命には意味(生きる目的)があり、その意味が人間を生かす原動力だ」と考えていましたが、強制収容所の極限状態の中で、彼は自分自身でその仮説を実証実験してみたのでした。「どうしてこんなことが起こるのか」と人生に向かって問いを投げかける方向性で考えるのではなく、むしろ反対に、自分が人生の方から問われている。「お前はこの現実に向き合うのか。この現実から、どのような意味を見つけ出して行くのか」と自問し、探求する方向性で考えるというのです。そして、彼の意志の力だけではなく、「奇蹟」としか呼べないような、多くの偶然も重なった結果、彼は生き残り、終戦を迎えることが出来ました。しかし、その時までには彼の家族は皆、すでに命を落としていて、再会は叶わなかったそうです。深い悲しみに打ちひしがれながらも、彼が使命感によって書き上げたのが、有名な著書『夜と霧』でした。

たとえどのような状況であっても、人は自分の人生から問いかけられている存在として、その問いに対して意味を見出して行くことが出来る。その意味は、すぐには発見できなくても、捜し求めていくことが出来る。だからこそ、今をどのように生きるか、どのような態度で現在と向き合うかを定めることが出来る。また起こってしまった過去の出来事についても、それ自体は変えることは出来なくても、その過去が持つ自分自身にとって意味は、その都度その都度、新しく意味付け直していくことが出来る。新しい意味を発見し続けて行くことが出来る。だからこそ、これからこの地上の命、肉体の生を、生きていく意味がある……。

毎日の暮らしの中で、「こんなはずじゃなかった」という言葉を耳にしたり、口にしたりすることは、少なくないかと思います。「こんなはずじゃなかった」という言葉は、何か予期せぬことが起こった時に、「どうしてこんなことが」という言葉と併せてよく出て来る言葉です。突然の災害、事故、病気、別れ、等々……。それらによって人生の計画、将来設計が変わってしまった。そのような時に、その原因や意味を、明確に分かりやすく外から教えてくれる宗教は、カルトなのではないかと思います。例えば「あなたに不幸が続いているのは、あなたの先祖が、何かをしたからだ。だからお祓い、清めのためにこれを購入しなさい」など。しかし、現実はそのような簡単なものではありません。むしろ、強いかと思えば弱かったり、しっかりと立っているかと思えば揺らぎ迷っていたりするような頼りない肉の体を生きている私たちです。そのような私たちを支えて、生かしてくれるのが、天から与えられる永遠の住まい、永遠の命です。そしてそれが与えられる保証、手付金として、私たち一人一人には神様からの霊が与えられています(5)。

私たちが常に、自らの命、歩みを振り返り、そこに新たな意味を見出して行く時、そこにはいつも共にいて下さる神様がおられます。それが出来ているということ、出来るということ、そのことこそが神様からの霊が共に働いておられることの証しなのだと思います。私たちが不幸な人生を嘆き、人生を問うのではなく、むしろ人生の方から、私たちが問われていると考える時、もうすでに神様と共に一步を、踏み出しているのではないのでしょうか。今、この時も、悲嘆に暮れ、希望を見出せずにいる方々がおられます。隣り人を必要とされている方々の隣へ行って、「あなたがたも隣り人になりなさい」(ルカ 11:37)というイエス様の言葉に押し出され、私たちはここから歩み出して参ります。